

第5回文学部フォーラム 「徳富蘆花生誕140年記念シンポジウム」報告

山崎 健司（日本語日本文学科長・日本古代文学）

2008年（平成20）は、水俣出身の作家・徳富蘆花（1868～1927）が誕生して140年目のメモリアル・イヤーであった。熊本県立大学文学部日本語日本文学科では、ここ数年、公開講演会など機会を捉えては郷土にゆかりのある文学者・文学作品をひろく一般市民に紹介し、再評価することに努めてきたが、本年は文学部フォーラムに大学院文学研究科博士課程の設置記念を兼ねて、6月と10月の2回にわたり、標記シンポジウムを開催するに至った。

第1回のシンポジウムは6月14日、「蘆花・熊本からの発信」と題し、主として蘆花の人物像を明らかにすべく、熊本市大江の徳富家旧居で蘆花の兄・蘇峰が開いた大江義塾跡にある徳富記念園館長の山並信久氏、熊本日日新聞社文化部長の松下純一郎氏、水俣市立図書館長の坂本直充氏、菊池市国際交流課の津留今朝寿氏、蘆花研究者で神奈川工科大学非常勤講師の布川純子氏によるパネルディスカッションのほか、熊本県立第一高等学校2年生による『思い出の記』についての感想文、世界平和を唱えた蘆花の思想を尋ねて本学英语英米文学科学生によるエスペラント語についての発表が行われた。坂本氏は生家のある水俣における蘆花の評価、津留氏は蘆花の妻・愛子の生地が菊池であることから、愛子の側から捉えた蘆花像をそれぞれ語られ、パネリスト各氏がそれぞれの立場から蘆花の人物的魅力を浮き彫りにされた。高校生の感想文は蘆花の作品が現代の若者にじゅうぶん訴えかける力を持っていることを証明していた。



左・パネルディスカッション

右・英文科学生によるエスペラントについての発表

第2回は、蘆花生誕の日である10月25日に、「至宝の蘆花文学」と題し、作品の魅力に焦点を当てたシンポジウムを行った。ここでは、蘆花全集の編纂に従事された愛知教育大学名誉教授の吉田正信氏、本学の蘆花研究プロジェクトに参画され、第1回から登壇いただいた布川純子氏のおふたりによる講演2題、本学日本語日本文学科学生による、未翻刻の書翰を含む蘆花自筆の資料解読の成果報告、吉田・布川両氏に本学の川平敏文准教授、大島明秀講師を加えたパネルディスカッション、そして熊本近代文学館の鶴本市朗氏から同館における蘆花の位置づけについての紹介があった。



写真左から吉田正信氏、布川純子氏、鶴本市朗氏

このうち、パネルディスカッションでは、半藤英明文学研究科長の司会で、蘆花文学の歴史的変遷と今後の研究の方向性についての意見交換が行われた。なお、前日には、本学の1年次生を対象とする特別講義で筑波大学・群馬県立女子大学名誉教授の平岡敏夫氏に蘆花文学の魅力を講じていただき、25日のシンポジウムと連動して、本学附属図書館では、今回紹介した書翰15通を含む蘆花の貴重資料の展示も行われた。



写真左・日文科学生による蘆花書翰紹介 右・パネルディスカッション



蘆花私信

徳富蘆花は、かつては国民的作家として一世を風靡したが、こんにちではその作品を文庫等で入手することすら難しくなりつつある。しかしながら、その作品は、けっして過去のものとして葬り去られるべきものではなく、21世紀の現代においても光彩を発揮し続けていることが、このたびのフォーラムを通じて再確認されたように思う。

なお、この成果は、近日、熊日新書の一冊として刊行の予定である。併読いただければ幸いである。